



今年はまだ梅雨が明けず、降り続く雨とにらめっこの毎日でしたが、8月に入ってようやく夏本番!!子どもたちが待ちに待っていたプール遊びを毎日全力で楽しんでいます。

子どもたちは毎日の暑さをものともせず、夢中になって遊んでいます。園でも、適切な水分補給と涼しい部屋での休息を心がけていますが、夏場は予想以上に体力を消耗しています。ご家庭に戻ったあとも、十分な栄養とたっぷりの睡眠がとれるようご配慮いただき、子どもたちが生き生きと夏の生活を楽しめるようお願いいたします。

夏バテに負けないために

- ①たくさん遊んだ後は、十分に体を休めて、しっかりと睡眠を取りましょう。
- ②肉・魚・卵・豆製品・乳製品・緑黄色野菜を食べ、バランスの良い食事を心がけましょう。また、朝食は抜かずにしっかり食べましょう。
- ③牛乳やスープも水分補給のひとつです。清涼飲料水はできるだけ減らして、麦茶やお水を飲むようにしましょう。
- ④戸外へ出るときは、直射日光を避けるために、帽子をかぶりましょう。



蚊対策

園では手作りの虫除けスプレーを使用しています。

- ・精製水
 - ・アルコール
 - ・レモングラス (天然植物精油)
- ⇒虫が嫌いな成分が入っています



8月の予定

- 4(火) 音楽指導(幼児)
- 6(木) 避難訓練
- 24(月) 職員園内研修
- 24(月) 体育指導(幼児)
- 24~28 身体測定
- 28(金) お誕生日会

◎プール納めにつきましては気温の状態などにより変更となる場合があります。その際には改めてご連絡させていただきます。

9月の予定

- 1(火) 防災集会
- 3(木) プール納め
- 3(木) 歯科検診
- 4(金) 流しそうめん
- 10(木) 音楽指導(幼児)
- 11(金) 虫歯予防集会(幼児)
- 14~18 身体測定
- 16(水) 調理保育(くま)
- 18(金) 職員園内研修
- 23(水) 体育指導(幼児)
- 25(金) 職員会議
- 25(金) お誕生日会
- 30(水) 運動会総練



育児でたいせつな待つという気持ち

子どもへのまなざし 佐々木正美著 福音館書店より



教育とか育てるということは、私は待つことだと思うのです。「ゆっくり待っていてあげるから、心配なくていいよ」というメッセージを、相手にどう伝えてあげるかです。子どもにかぎらず人間というのは、かならずよくなる方向に自然に向いているわけです。けがでも、ほうっておいたら、かならず治る方向へいくわけでしょう。ばい菌がつかないように、消毒だけしておけばいいのです。風邪だって薬なんか飲まなくて、じっと休んでいればいい治るわけです。

人間の体というのはかならず治るほうに行く、よくなるほうへいこうとするのです。あるいは成長しようとする、発達しようとするのです。もちろん老化ということもありますけれど、とくに元気な子どもなんかは、すべてのことがかならず、いいほうへ向かおうとしているのです。

だから、じゃまをしなれば、みんないい子になって、個人差はありますが、子どもりの素質と個性と能力で、みんな発達していくわけです。ですから、待つという姿勢ができましたら、もうこれで、人でもなんでも育てることの名人になれると思います。このことは草花を育てるのも、野菜を育てるのも、果物を育てるのも、人を育てるのもまったくおなじで、ひそかに最善をつくして、じっと待っていればいいのです。待つことに楽しみや喜びを感じられるようになったら、人でも、ものでも、育てるのは上手になりますよね。

ですから、じっさいの育児は育児書に書いてあるのよりは、ゆっくりめでいいのです。まずこのことを、若いお母さんや保母さんについてあげたいですね。「いろんな発達や成長は、育児書に書いてあるのより、すこしゆっくりめでいいのです、というぐらいの気持ちでどうですか」ということを。なおかつ個人差があって、夜泣きをする赤ちゃんがいたり、あまりない子がいるわけです。子ども一人ひとり、そのほかさまざまなことに、相当大きな個人差があると思います。ですから、親の好みや都合どおりにいかない子どもがいたり、それはしかたがないのです。

昔の育児では、だれもあせらなかつたですね。子どものいうことを、だれもがゆっくり聞いてあげたのです。貧しくてなにもかも不自由だった時代には、育児が思いどおりいかないことぐらいで、親などの保護者はいららなかつたのです。ところが現代では、多くのことが自由になって、子どもがちょっと思いどおりにならないと、腹を立てたり途方にくれたりしてしまいます。

昔はいろんなことが、意のままにならないのが、ふつうでしたからね。しかも家族が多かつた。ですから、育児をする母親とか祖父母とか、いつも子どもを肌身はなさず、そばにおいてみていたのです。おんぶしているとか、乳母車にのっけて公園にいってるとか、ようするに、子どもからいつとき目をはなさないで、肌身はなさず育てたのです

ね。ということは、子どもが背中であたり、ぐずれば、「どうしたの? どうしたの?」と、すぐに相槌をうってあげられました。

子どもの要求にぴったり合ったことを、してあげたかどうかは別にしても、子どもが要求を無視されるなんてことは、ほとんどなかつたのです。子どもの期待、希望、要求が、なんの応答もなしに、無視されるなんてことはありませんでした。これが子どものなかにどれだけの安心感や、相手にたいする信頼感、自分にたいする安心感と自信を育てたかわからないですね。

しつけをするときだって、けっしていそぎませんでした。おむつがとれないなんて子は、世の中にいないんだというぐらいの気持ちは、だれでももっていました。お箸でうまくご飯を食べられなくて、だれだってそんなことはできるようになるのだから、競争しない、あせらない、いそがない、こういう育児であつたのです。これがだいじなことですよ。当時の親に「いつからできるようになるか、楽しみに待っていてあげるからね」、なんていう表現や感情はなかつたかもしれませんが、結果として、それとおなじような雰囲気の育児であつたのです。

育児をするうえでもっともたいせつなことは、子どもに生きていくための自信をもたせてあげることです。それには子どもにとって、最大のサポーターであり理解者が親なのだということ、子どもにつづればそれでいいのです。あとはいららしたりあせったりしないで、じっくり育児に取り組めばいいのです。

こちらがあせっていると、子どもは大きくなるにつれて、もっとあせります。ですから、なにごとちよつとやってみて、どうもだめそうだと思うと移り気をおこして、すぐぱつと変わろうとするようになります。なにをやっても自信がなくて、成果があがってくるまで、自分で自分を待たない子になりがちでしょう。ですから成長や発達してくるのを、あるいは、いろんなことが身についてくるのを、こちらがゆっくり待ってあげる姿勢をふだんからもっていると、それが子どもにも身につきます。忍耐づよさが身につくといつてもいいと思います。

ですから、待ってあげる姿勢は、子どもを十分信頼しているという気持ちを伝えることにもなります。このことは子どもへの愛を、子どもにもっともわかりやすく伝えることになるのです。

